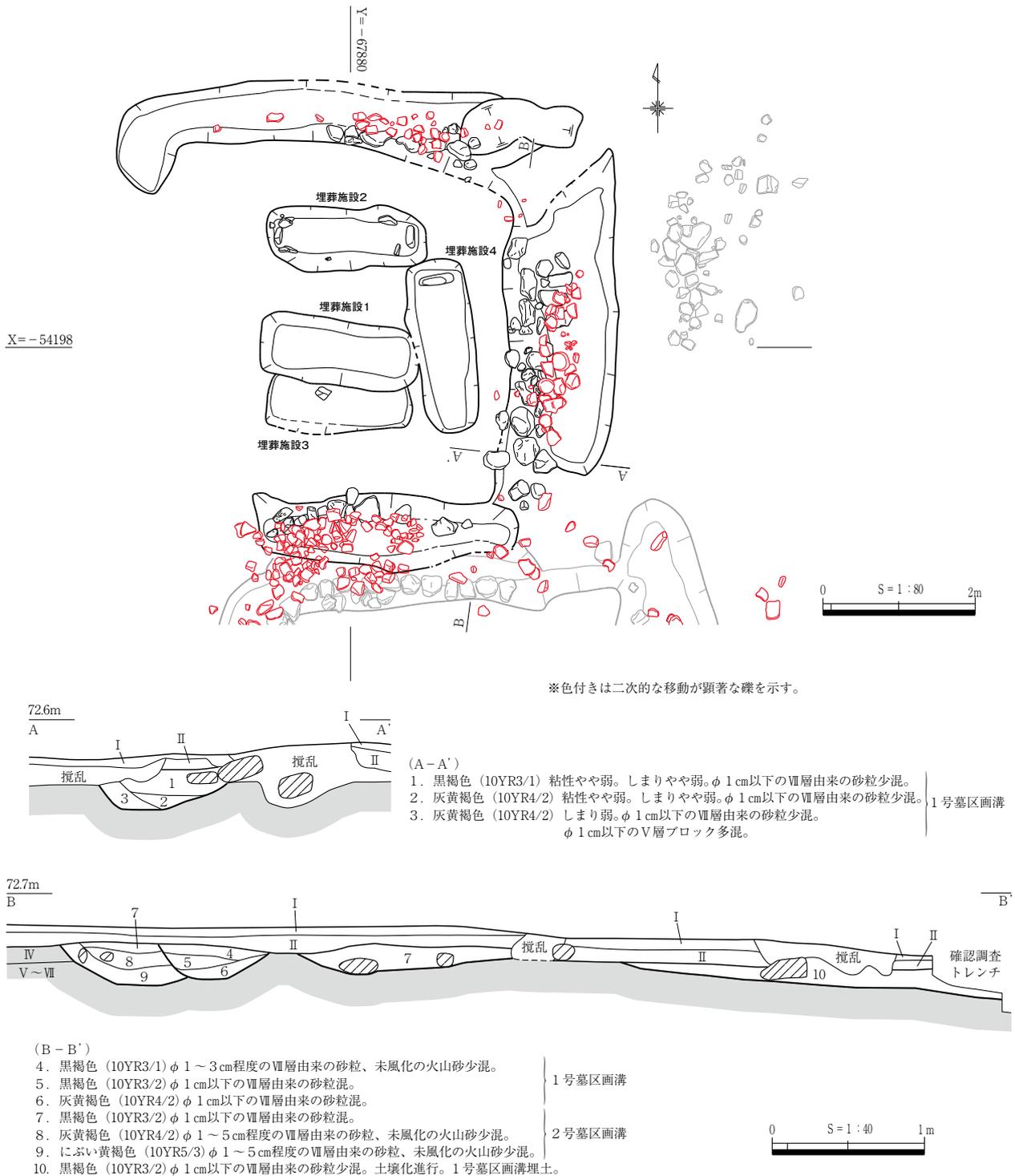


1号墓(第16～23図、PL.7～21、写真11～15)

(1)立地・規模・墳形

B1・2、C1・2グリッド、標高72.5mの尾根部に位置する。南北に延びる狭い尾根上に連なる墳墓4基のうち、最も北側に立地する。区画溝を接して2号墓が南側に所在し、当該箇所における区画溝埋土の切り合いから、1号墓は2号墓の後に築造されたと判断した(第16図B-B'セクション、第17図C-C'セクション)。

墳丘の平面形は方形である。区画溝が西側で途切れるため全容が不明だが、墳丘規模は南北軸の数



第16図 1号墓礫検出状況



写真11 1号墓北辺(北から)



写真12 1号墓東辺(北半部：東から)



写真13 1号墓東辺(南半部：東から)



写真14 1号墓南辺(南から)

値から一辺5.1m程度に復元できる。明確な盛土は遺存しておらず、墳丘高は最も比高差の大きい区画溝北辺の底と墳頂までで0.87mである。

(2) 区画溝

墳丘西辺以外に伴う。西辺は、北辺・南辺の遺存状況から勘案すると流失した可能性がある。北辺の西端は、若干南側へ折れるような様相が窺えるが、当該箇所では深さを減じており、以降の詳細は判然としない。

検出面での規模は北辺・南辺で幅0.38～0.52m、深さは最大で0.18mにとどまり、遺存状況は不良である。東辺は幅0.69～0.74m、深さは最大で0.30mと比較的規模が大きい。

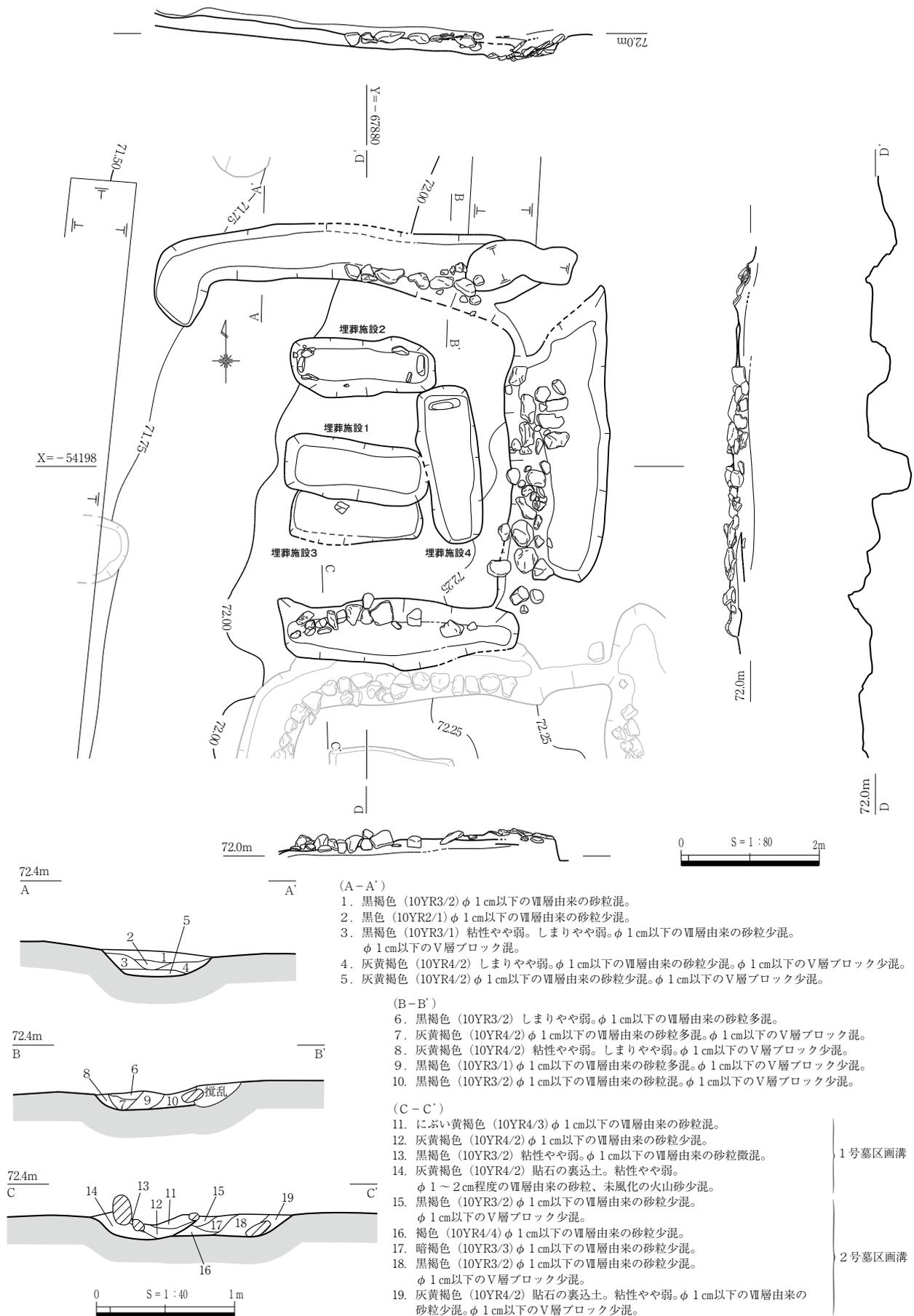
溝底の標高は、北辺が東側71.96m、西端71.66m、南辺が東端72.15m、西端が71.98mと東西で20～30cm程度の高低差があり、いずれも東から西へ緩やかに下降する。東辺は北端と南端共に72m弱と明瞭な差はない。

北東隅、南東隅は、各辺の溝が深さを減じ、陸橋状を呈する。陸橋状の箇所と区画溝東辺の底との比高差は北東隅で0.16m、南東隅で0.12mにとどまる。ただ、陸橋状の箇所にも樹木根の攪乱が及んでおり、当初の比高差は現状より大きかったと推測する。

溝の横断面形は浅い皿状を呈し、溝掘方の肩はやや不明瞭である。埋土はⅢ層に近似する黒褐色系、基盤層ブロックが若干混じる灰黄褐色系が主体となる。遺存状況から勘案すると溝底付近の堆積と考えられるが、盛土が二次的に流入した痕跡は窺えなかった。埋土中からは転落石や土器片が出土している。

(3) 貼石

概要 区画溝が遺存する各辺において設置が確認できる。ただ、区画溝と同様に遺存状況は不良で、特に北辺、南辺は墳裾付近が残存するに過ぎない。先述のとおり東辺は区画溝が比較的深く掘削されており、原位置に近い状態を保つ貼石が幾分多く認められるものの、ほとんどが樹木根によ



第17図 1号墓平面・立面・断面図



写真15 区画溝南辺の転落石(南から)

る攪乱を受け若干移動している(写真12・13)。第17図において、原位置の維持について厳密に取捨を行うと、大方の貼石が図示の対象から外れてしまうため、二次的な移動が軽微と判断できるものについては図示することとした(写真11～14)。貼石の裏込め土は黒褐色、灰黄褐色を呈し、溝埋土の色調と近似する。以下、各辺ごとに詳述する。

北 辺 区画溝検出範囲の東寄りが遺存し、西側は欠落したものとする。墳裾の一段が辛うじて

遺存し、長軸0.3～0.4m程度の石で構成される。石の長軸は横向き、縦向きが混在するが、石組上端を揃える意図は窺える。段を構成する石の隙間や上段に施された可能性のある長軸0.1～0.2m程度の小振りな石が二次的にやや移動している状況が確認できる。

東 辺 間隙が目立つものの石組二段分の設置状況が窺える。墳裾の一段目には、北辺と同様に長軸0.4m前後のやや大振りな石を用いる。北寄りの石は樹木根の攪乱により若干ずり落ちているが、長軸を縦向きにして据えている。二段目は使用する石の大きさにより長軸の向きを変えて、段の高さを概ね揃える。大振りな石は、長軸を横向きにして設置される。北辺と同様、上段から転落したと想定できるものは0.2m前後の大きさである。

南 辺 西寄りを中心に墳裾を巡る段が残存する。石の長軸を縦向きにして、ほぼ隙間無く並べている。貼石の遺存状況の差に起因する可能性はあるが、横向きを主体とする北辺とは据え方が異なる。石の大きさは長軸0.3～0.4mが主体だが、小振りな礫を2段積み、石組の高さを揃える箇所もある。他辺と同様に、溝埋土中に折り重なるように転落していた石は0.1～0.2m大のものが大半である(第16図、写真15)。

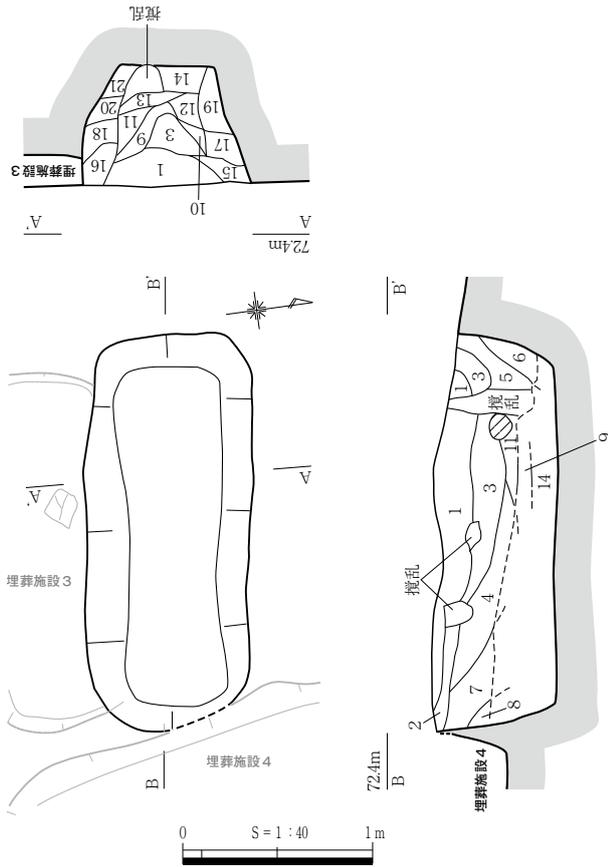
(4) 埋葬施設

概要 1号墓では埋葬施設を4基、いずれも墳丘上で検出した。墳丘のほぼ中央に位置する木棺墓を埋葬施設1、北寄りに位置する木棺墓を埋葬施設2、埋葬施設1に接して南側に位置する墓壙(土壙墓か)を埋葬施設3、東寄りに位置する木棺墓を埋葬施設4と呼称する。

墓壙の長軸は埋葬施設1～3が東西方向、埋葬施設4のみが南北方向を採る。各埋葬施設は、Ⅱ層下のⅢ層(クロボク)、漸移層であるⅣ層以下の基盤層にて検出した。それぞれの墓壙は、掘方を僅かに接して掘り込む箇所があるが、先後関係が判明したのは埋葬施設1・3のみで、埋葬施設3が埋葬施設1に先行する。各埋葬施設における墓壙の平面規模の差は少ないが、墳丘のほぼ中央に位置すること、墓壙の深さから勘案すると埋葬施設1が中心埋葬と考えられる。いずれの埋葬施設も、棺内への副葬品は皆無であった。

埋葬施設1(第18図、PL.13・14) 墳丘のほぼ中央に位置する。墓壙の規模は、長軸2.12m、短軸0.89mである。検出面からの深さは0.65mで、墓壙底面付近は固結した硬化火山砂(Ⅶ層)を掘り込んでいる。

墓壙内における土層堆積の所見から、木棺の痕跡が窺える。墓壙短軸土層断面(A-A'セクション)において、9～14層と16～21層の境目が概ね直線的なラインとして確認でき、それぞれを棺内、棺裏込の堆積と想定した。棺裏込と目される堆積は、ホーキ火山砂層(Ⅶ層)由来の砂粒混入量が多い傾向にあり、平面的な観察でも棺内、棺外における堆積の相違が大まかにではあるが確認できた。長軸



第18図 1号墓 埋葬施設1

1. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。φ 1～2cmのⅤ層ブロック多混。
3. 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。砂質卓越。
4. 黒色 (10YR2/1) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 3～5cmの未風化の火山砂微混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。
5. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック多混。棺裏込、砂質卓越。
6. 黒褐色 (10YR2/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。棺裏込、砂質卓越。
7. 褐灰色 (10YR4/1) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。砂質卓越。
8. 黒褐色 (10YR2/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。棺裏込。
9. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまり弱。φ 1～2cm程度のⅤ層ブロック非常に多混。
10. 褐灰色 (10YR4/1) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1～2cmのⅤ層ブロック多混。
11. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅤ層ブロック混。
12. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1～2cmのⅤ層ブロック混。色調Ⅺ層に近似。
13. 褐灰色 (10YR4/1) 粘性弱。しまり弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。
14. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅤ層ブロック多混。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。
15. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性弱。しまり弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。φ 1～2cmのⅤ層ブロック混。棺裏込、砂質卓越。
16. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性弱。しまり弱。φ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。棺裏込、砂質卓越。
17. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘性弱。しまり弱。φ 1cm以下のⅤ層ブロック多混。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。棺裏込、砂質卓越。
18. 褐灰色 (10YR4/1) 粘性弱。しまり弱。φ 1～2cmのⅤ層ブロック多混。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。棺裏込、砂質卓越。
19. 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。Ⅴ層由来土が主体。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。棺裏込、砂質卓越。
20. 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘性弱。しまり弱。φ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。棺裏込、砂質卓越。
21. 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘性弱。しまり弱。φ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。棺裏込、砂質卓越。

の土層確認用ベルトの下半が記録前に崩壊したため、詳細は不明となってしまったが、棺蓋の腐朽に伴い墓壙埋土が棺内に落ち込んだ状況は窺えた。棺内流入土、棺裏込土共に基盤層由来の砂粒を多く含み、しまりが弱い。また、本遺跡における木棺墓で特徴的な棺裏込への礫混入は認められない。

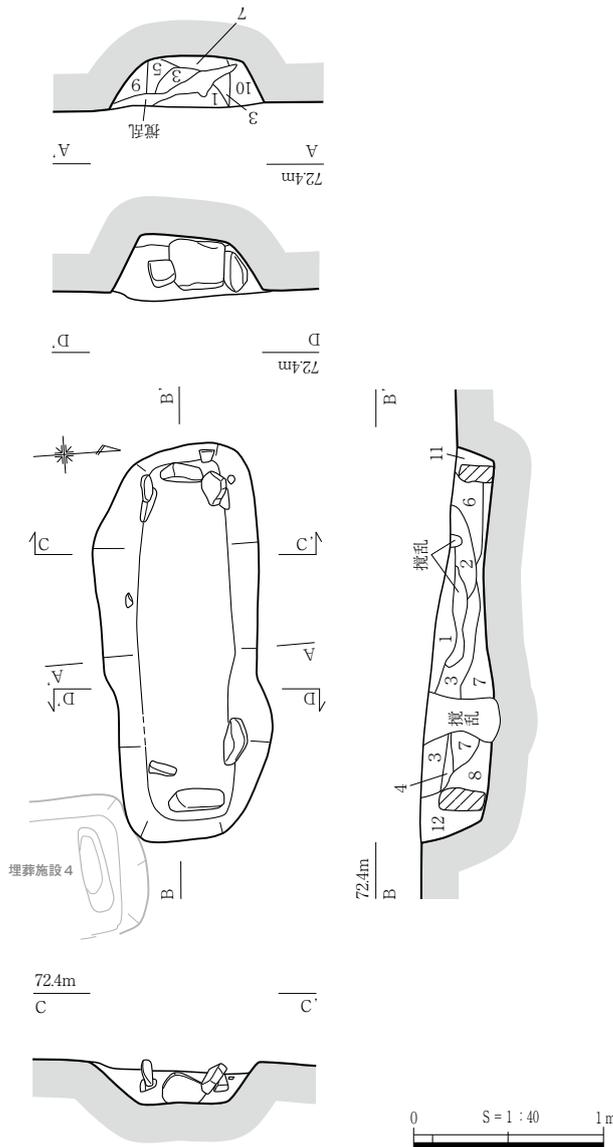
墓壙底面にいわゆる小口穴は施されておらず、棺の法量は不明確だが、墓壙断ち割りの所見から推定すると長軸1.6m前後、幅は墓壙短軸の土層断面から0.42m程度に復元できる。

棺の小口幅が不明であること、墓壙底面レベルも明瞭な差が認められないことから、埋葬頭位については不明である。

埋葬施設2 (第19図、PL.15・16) 長軸は埋葬施設1とほぼ平行し、北へ約0.6m離れ位置する。墓壙の規模は、長軸2.12m、短軸0.88mである。検出面からの深さは0.37mで、埋葬施設1の半分程度である。

墓壙内における土層堆積の所見により、木棺の痕跡が窺える。墓壙短軸の土層断面(A-A'セクション)では、1・3・5・7層と9・10層との境界が直線的なラインとして検出され、それぞれが棺内・棺裏込を示すと想定した。墓壙の遺存状態は樹木根の攪乱により不良だが、棺蓋の腐朽により棺内に墓壙埋土が落ち込んだ様子は窺え、埋土の色調は黒褐色を主体とする。埋葬施設1と比べて基盤層(Ⅶ層)由来の砂粒混入量は少ない。裏込には主に掘削した土を充当すると仮定すれば、本埋葬施設の掘削はⅦ層まで及んでいないことから、砂粒の含有量は墓壙の掘削深度に起因する可能性が考えられる。

墓壙底面に小口穴の掘り込みは認められなかったが、棺裏込に石を据えているのを確認した。石は貼石と同じ石材を主に用いる。両小口の棺材背面に板状の石を当て、両小口を中心に棺の長側板側にも石を配する。これらの石は、棺材を支持するために設置されたと考えられ、両小口に配された石間



1. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒・未風化の火山砂、Ⅴ層ブロック多混。
2. 黒色 (10YR2/1) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒、Ⅴ層ブロック少混。
3. 黒褐色 (10YR3/1) しまりやや弱。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒、Ⅴ層ブロック少混。
4. 灰黄褐色 (10YR4/2) しまりやや弱。φ 1～3 cmのⅤ層ブロック多混。
樹木根による攪乱を受ける。
5. 黒色 (10YR2/1) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒、Ⅴ層ブロック少混。
6. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。
φ 1 cm以下のⅤ層ブロック混。
7. 灰黄褐色 (10YR4/2) しまりやや弱。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。
φ 1～3 cmのⅤ層ブロック混。
8. 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや弱。しまり弱。φ 1 cm程度のⅦ層由来の砂粒少混。
φ 1 cm以下のⅤ層ブロック混。
9. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1～2 cm程度のⅦ層由来の砂粒・未風化の火山砂、
φ 1 cm以下のⅤ層ブロック少混。
10. 暗褐色 (10YR3/3) φ 1～3 cm程度のⅦ層由来の砂粒・未風化の火山砂、Ⅴ層ブロック少混。
11. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。6層と色調類似。
12. 黒褐色 (10YR2/2) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒、Ⅴ層ブロック混。

第19図 1号墓 埋葬施設2

かに接するほどであったため、互いの先後関係は判然としない。検出面における墓壙の長軸は2.31m、短軸は0.89m、深さは0.36mである。

墓壙内における土層堆積の所見から、木棺の痕跡が窺える。墓壙短軸の土層断面(A-A'セクション)では、1・2・4～6層と13～17層との境界がやや斜めだが概ね直線的なラインで検出され、それぞれを棺内、棺裏込の堆積と想定した。墓壙内の堆積は、棺蓋の腐朽により棺内に墓壙埋土が落ち込んだ様子が窺える(1・2層)。埋土の色調は灰黄褐色、黒褐色を主体とする。棺内流入土、棺裏込

の距離を木棺の長軸規模に置き換えれば、長軸規模は、概ね1.6m程度となる。小口幅は判然としないが、墓壙短軸の土層断面から木棺の短軸は概ね0.42m程度に復元できる。

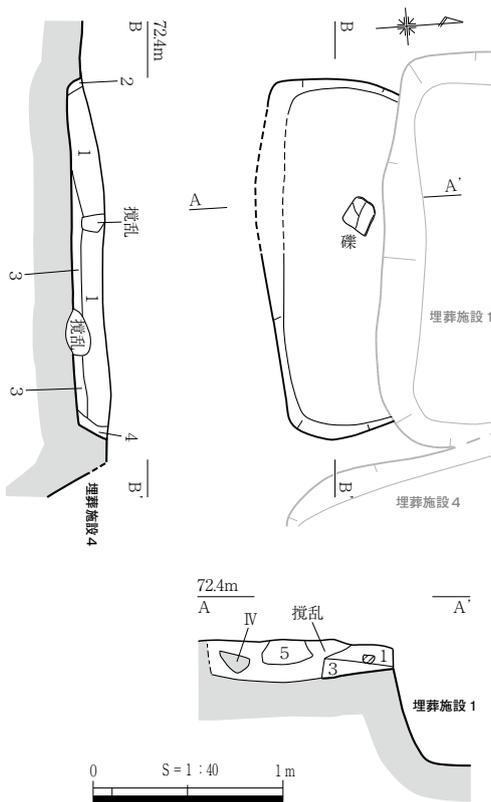
本埋葬施設の埋葬頭位については、墓壙の平面形・底面レベルから明確な判断材料が得られず、判然としない。

埋葬施設3 (第20図、PL.16・17) 墓壙の長軸は埋葬施設1・2にほぼ平行し、埋葬施設1墓壙に北側を掘り込まれる。検出面からの深さは0.19mに過ぎないが、掘方の平面形態と他の埋葬施設と概ね対応する配置関係から埋葬施設と判断した。長軸は1.92m、短軸は最大で0.64mを測る。

遺存する埋土の堆積からは、木棺の痕跡は確認できなかった。埋土の色調は黒色、黒褐色を主体とする。埋土中に礫が含まれていたが墓壙底面から浮いており、流入土に伴う可能性が考えられる。

墓壙全体をとおして詳細が不明なため、埋葬頭位についても判然としない。

埋葬施設4 (第21図、PL.18・19) 墳丘内東寄りに位置する。1号墓埋葬施設のなかで唯一、墓壙の長軸を南北方向に採る。当初、Ⅱ層下のⅣ層で精査を行ったが検出されず、後に他の遺構確認のためⅤ層まで掘削した際に検出した。墓壙掘方の一部が埋葬施設1・2と重複するが、検出面においては僅



1. 黒色 (10YR2/1) φ 1 cm以下のV層ブロック微混。
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) φ 1 cm以下のV層ブロック微混。
3. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1 cm以下のV層ブロック混。
4. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1 cm以下のV層ブロック混。
5. 黒褐色 (10YR3/1) φ 1～5 cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。φ 1 cm以下のV層ブロック微混。

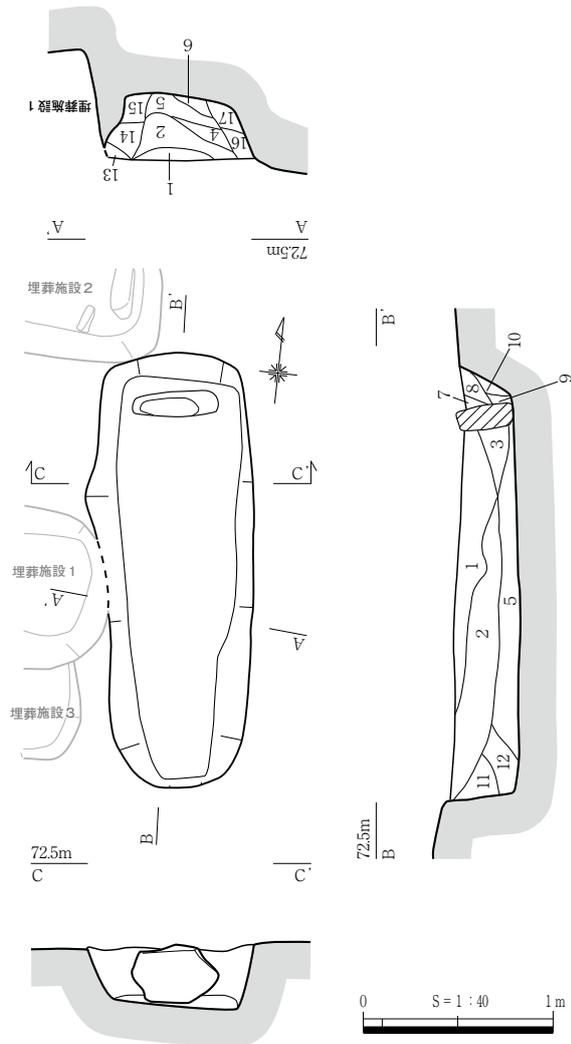
第20図 1号墓 埋葬施設3

土共に樹木根の攪乱の影響を少なからず受けており全般にしまりが弱く、土質における両者の差異は明瞭ではない。

墓壙底面に小口穴等の掘り込みは認められないが、埋葬施設2と同様に棺小口の背面北側に据えたと考えられる河原石を1点検出した。石材は墳丘に施される貼石と同じで、長軸0.45m、短軸0.3m、厚さ0.14mである。また、墓壙長軸断面の11・12層は、小口板が土圧で倒れた痕跡の可能性を考えた。

これらの所見をもとに木棺の規模を概算すると、長軸は1.7m、幅は短軸土層断面(A-A'セクション)から0.3～0.4m程度に復元できる。

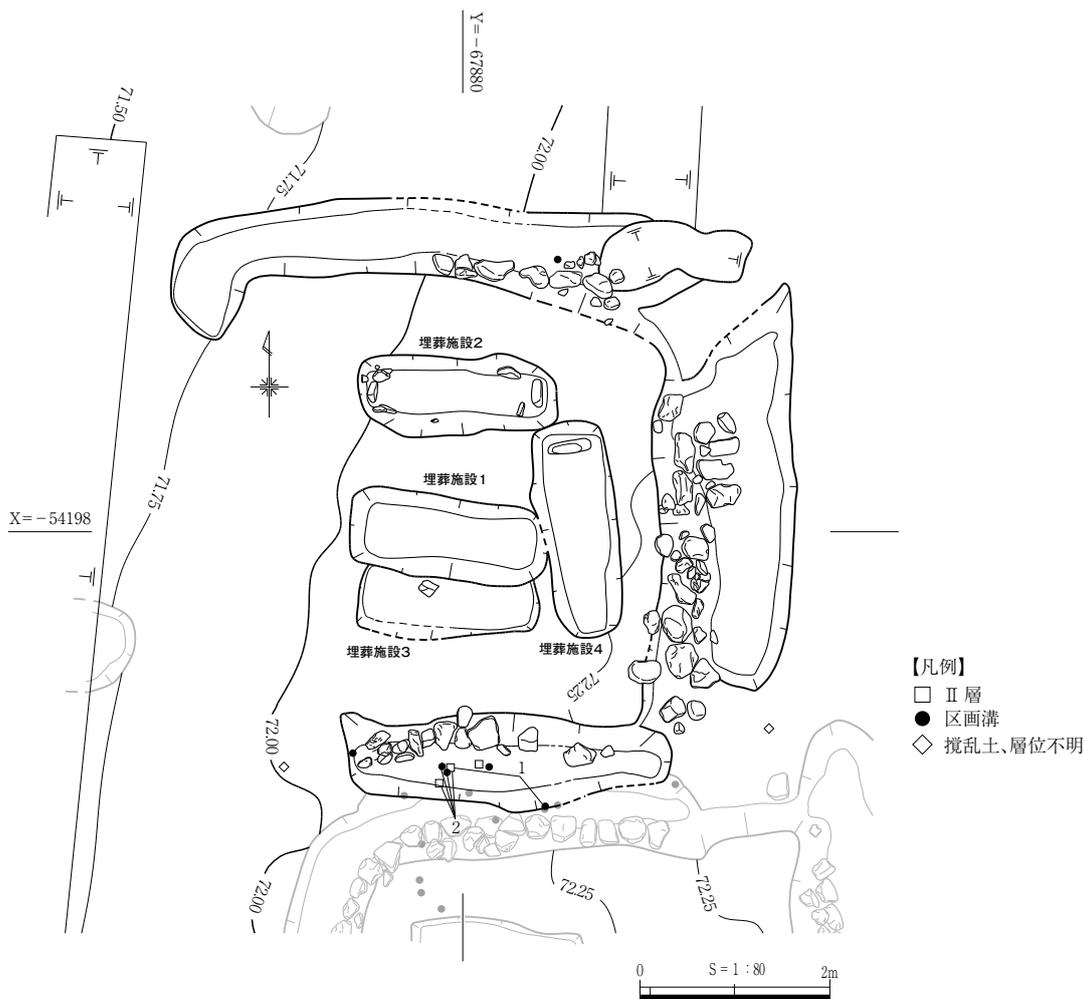
木棺の小口幅については不明だが、墓壙北側が南側よりも幅広であること、墓壙底面レベルについても北側がやや高いことから、被葬者は北頭位であったと推定する。



1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。φ 1～2 cmのV層ブロック混。
2. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。φ 1 cm以下のV層ブロック多混。
3. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1 cm以下のV層ブロック多混。
4. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1 cm以下のV層ブロック多混。
5. 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘性弱。しまりやや弱。V層由来土が主体。φ 1～2 cmの灰黄褐色土 (10YR4/2) ブロック混。
6. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1～5 cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。φ 1 cm以下のV層ブロック多混。
7. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1 cm以下のV層ブロック混。
8. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性弱。しまりやや弱。φ 1 cm以下のV層ブロック混。
9. 黒褐色 (10YR3/1) 粘性弱。しまりやや弱。φ 1 cm以下のV層ブロック多混。
10. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性弱。しまり弱。φ 1 cm以下のV層ブロック多混。
11. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1 cm以下のV層ブロック多混。
12. 褐灰色 (10YR4/1) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1 cm以下のV層ブロック多混。
13. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性弱。しまりやや弱。φ 1～5 cmのⅦ層由来の未風化の火山砂混。φ 1 cm以下のV層ブロック多混。
14. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1～5 cmのⅦ層由来の未風化の火山砂少混。φ 1 cm以下のV層ブロック混。
15. 褐灰色 (10YR4/1) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1～5 cmのⅦ層由来の未風化の火山砂少混。φ 1 cm以下のV層ブロック多混。
16. 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1 cm以下のV層ブロック少混。
17. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1 cm以下のV層ブロック多混。

棺裏込

第21図 1号墓 埋葬施設4



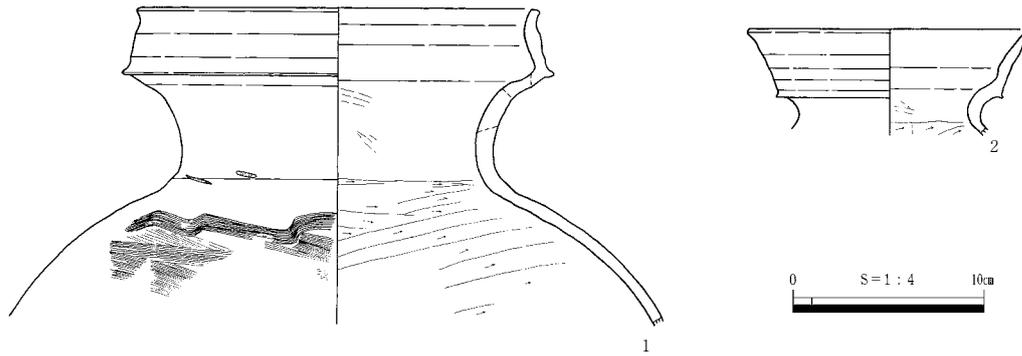
第22図 1号墓出土遺物分布図

(5) 出土遺物(第22・23図、PL.21)

表土(I層)や遺物包含層(II層)中、区画溝埋土中に転落石と共に土器が出土しているが、原位置を保つものは無い。出土土器の分布をみると、ほとんどが区画溝南辺の埋土中又はその上のII層中である。既述したように、区画溝南辺は2号墓区画溝北辺の一部を掘り込んでいる。したがって、2号墓帰属の土器を包含する可能性が当然ある。このように資料的な曖昧さは否めないが、2号墓に伴う可能性がより高い土器群と様相の比較を行うため、ここでは出土位置を重視し1号墓出土土器として取り扱う。

出土土器のうち、細片のため図化していないものもあるが出土総数は多くなく、個体数は少ないと考えられる。第23図1・2は土師器である。1は壺で、内傾する複合口縁を持つ。器壁が若干厚い印象を受ける。また、胎土の色調が橙色を呈し、他の土器群と異なる。天神川下流域編年(以下、天神川編年と呼称する)におけるII期に該当すると考える。2は土師器の甕で、外反して立ち上がる複合口縁部を持ち、口唇部は丸くおさめる。器壁の厚さ等、天神川編年I期の特徴を示すと考えられる。

出土状況が不良で、明確な帰属時期を示す素材に欠けるが、土師器壺(1)の年代観から1号墓の帰属時期は古墳時代前期前葉と想定する。



第23図 1号墓出土遺物

2号墓(第24～32図、PL.23～36、写真16～30)

(1)立地・規模・墳形

C1・2グリッド、標高72.3mの尾根部に所在する。南北に連続して構築される墳墓4基のうち、北から2番目に立地し、区画溝を接して北側に1号墓、南側に3号墓が位置する。区画溝埋土の切り合いの所見から、2号墓は3号墓より後に築かれ、1号墓に先行すると判断した(第34・35図A-A'セクション、第14図A-A'セクション等)。

溝により区画された墳丘の平面形は方形であるが、南辺中央が外方へ張り出し丸みを帯び、ややイレギュラーな形態を採る。先行する3号墓北辺の貼石列と平行しており、墳丘構築の際に3号墓を強く意識したことは明白である。墳丘の規模は南北軸が5.4m、東西軸が4.6mとやや南北軸が長いが、顕著な差ではなく方形の範疇に含まれよう。明確な盛土は確認できず、II層下は基本的にIV層以下の基盤層が露出する。墳丘高は、最も比高差の大きい区画溝東辺の底と墳頂で0.51mである。

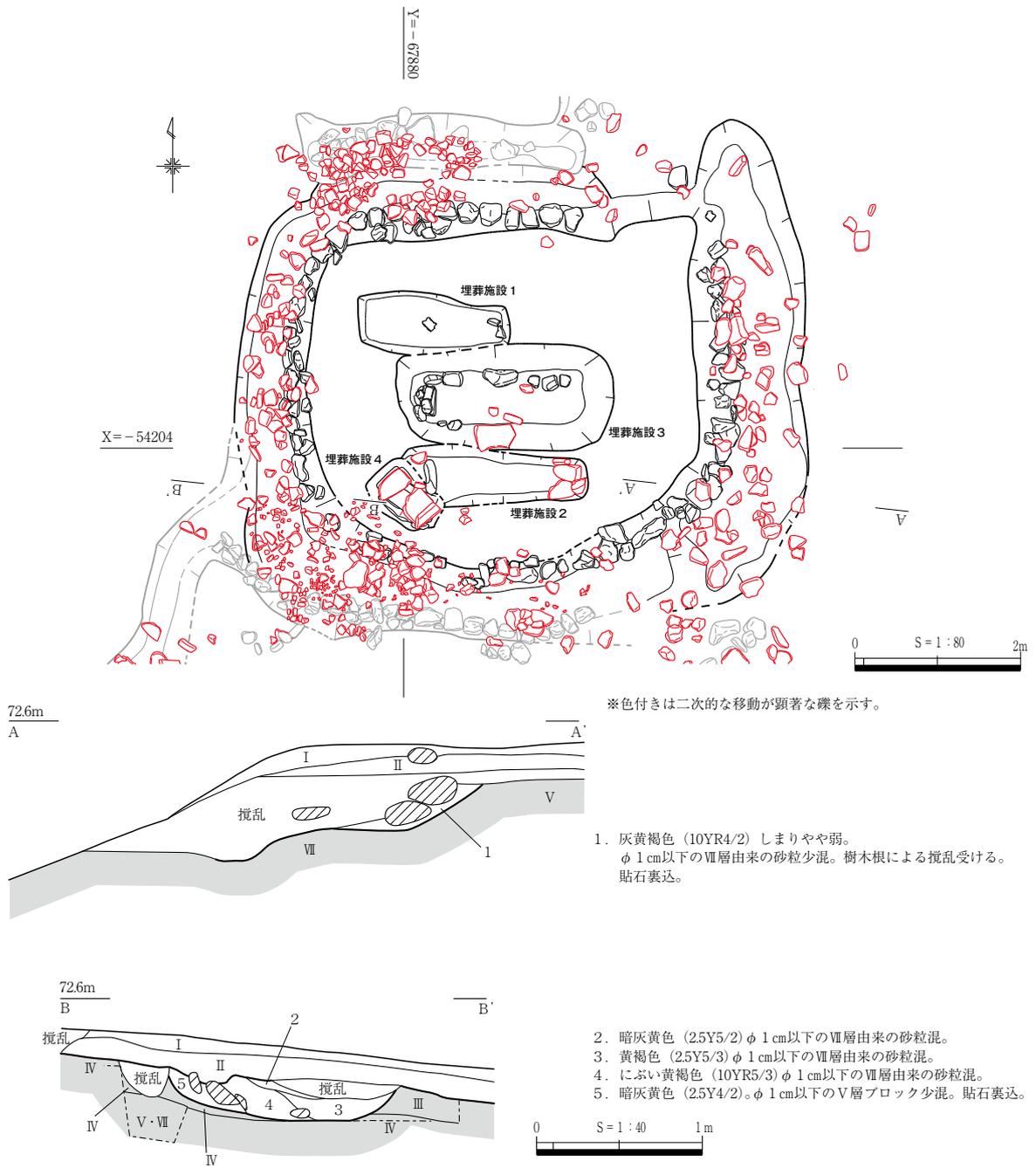
(2)区画溝

北東隅を除き、ほぼ全周する。北東隅は1号墓区画溝と重複する箇所と考えられるが、この箇所においては、樹木根の攪乱等で遺存状態が悪く、1号墓区画溝掘方との重複関係等、詳細は判然としない。ただ、不明瞭ながら区画溝北辺と東辺が当該箇所で深さを減じ、途切れる様子は看取された。先述のように、1号墓の南東隅は溝底が高くなり陸橋状を呈するが、当該箇所も同様な状況であった可能性がある。

検出面での規模について概観する。北辺の幅は1号墓区画溝と重複するためはっきりしないが、少なくとも0.6m以上となる。深さについては0.17m程度と、遺存状態は良くない。東辺は幅1.2～1.4m、深さは0.34mと規模が比較的大きい。3号墓区画溝と重複する南辺の肩は、第35図A-A'セクションの所見から3号墓北辺貼石の寸前にあると想定できるが、全般に攪乱を受け遺存状況が不良で3号墓区画溝埋土との峻別が困難であったため、平面的に溝幅を把握できなかった。深さは0.13m程度にとどまる。西辺は幅約0.8m、深さは0.12～0.21mを測る。

溝底の標高は、北辺が東側72.12m、西側71.97m、南辺が東側72.09m、西側71.90mと15～20cmの高低差があり、東から西へ緩やかに下降する。西辺は南側と北側の差が10cm以下で、傾斜は顕著ではない。東辺は北側と南側がいずれも71.98m近辺と差はほとんど無いが、中央が71.75mと0.2m強深くなり、特徴的である。また、全般に標高も他辺より低く、より深く掘削されていることが分かる。

溝の横断面形は全般に浅い皿状を呈し、掘方の肩は不明瞭である。このことは、遺存の度合いに起因するとは考えられる。埋土は、北辺と東辺が皿層に類似する黒褐色系を主体とするのに対し、西辺



第24図 2号墓礫検出状況



写真16 区画溝西辺埋土中の転落石(南西から)

と南辺は基盤層のⅤ層に色調が近似する灰黄褐色系、にぶい黄褐色系が主体となり、様相が異なる。遺存状況を考慮すると溝底付近の堆積と考えられ、西辺・南辺で認められる基盤層(Ⅴ層)に類似する堆積は、盛土由来の可能性がある。貼石全辺の埋土中には転落石が多数認められるほか、後に詳述するが土器片もそれらに伴って出土している(写真16)。

(3) 貼石

概要 先述のように区画溝が深さを減じる北東



写真17 2号墓北辺(東半部：北から)



写真18 2号墓北辺(西半部：北から)



写真19 2号墓北辺～西辺(北西から)



写真20 2号墓西辺(北西から)

隅には貼石が巡っていないが、それ以外の箇所では設置が確認できる。ただ、貼石の多くは溝内に転落しており、墳丘の遺存状態の悪さを物語っている(第24図)。原位置を保持するもの、二次的な移動が軽微なものを図示したのが第25図で、墳裾付近の石組が辛うじて遺存する。貼石の裏込め土は黒褐色、灰黄褐色系が主体で、基盤層由来のブロック等の混入は顕著でなく、区画溝埋土との峻別が難しい箇所が多い。以下、各辺ごとに概要を述べる。

北 辺 墳裾の一段、西側では二段まで一部遺存する。一段目は、長軸0.3～0.4mの石を隙間少なく据えている。石は長軸を縦向きにするものが多いが、横向きにするものも混在し厳密な規則性は無い。西側へ溝底の標高が緩やかに下がるが、一段目の石組みの上端もそれに同調して下がり、そこに大振りな石を充てるなど上端レベルを水平に保持する意図は働いていない。二段目の石は、一段目上側に生じた間隙を埋めるように施され、長軸0.1～0.2mのやや小振りものを用いている。

西 辺 墳裾の概ね2段が残る。一段目の石は、長軸0.2～0.3mのものが中心となり、他辺と比較するとやや小振りである。また、長軸を横向きに据えるものが多数を占めるのも特徴である。石組みの上端レベルを概ね揃える意図は窺え、二段目は北辺と同様に0.1～0.2m程の石材を一段目上側の間隙を意識しつつ、形状の見合ったものを選択し充てがっている。本辺においても、溝中に多数の転落石を確認した。それらの長軸は0.1～0.15m



写真21 2号墓西辺～南辺(西から)



写真22 2号墓南辺(南西から)

が主体である。

南 辺 南西隅の石組が一部欠落する。これは、攪乱による転落又は二次的な移動によるものである。他にも一部欠落が認められるものの、南側の3号墓側に張り出す区画溝掘方に沿い、墳裾に据えられた2段が残存する。一段目の石は長軸0.1～0.4mと大きさが不揃いだが、大振りな石は長軸を横向きに据え、石組上端レベルを概ね合わせている。

東 辺 南東隅から北東隅にかけて区画溝が一段深く掘り込まれる。区画溝の深さが増すことに付随して、貼石の遺存状況も良好となる。墳裾をなす2段が確認できるが、他辺と比較し二段目の遺存状況が良い。

一段目は、他辺と同様に長軸が0.3～0.5m程度の石を据える。区画溝の項で述べたように、溝底は本辺のほぼ中央に向かい深くなるように掘削されている。溝が深さを増す中央付近に施された石の長軸は縦向きである。南東隅部付近のように溝底が上がってくると、長軸を横向きにするものが混在するようになる。

二段目を構成する石は、長軸0.2m前後を主体とするが、一段目上端の高さに応じて据える向きを変え、大きさが異なる石を組み合わせるなどして、二段目上端は高さを概ね揃え丁寧に設置する意図が窺える。

本辺においても、溝中に多数の転落石が認められた。長軸0.3m程度と一段目より上位の貼石としては大振りなものが多く、この点からも本辺の貼



写真23 2号墓南辺(東半部：南から)



写真24 2号墓南辺～東辺(南から)



写真25 2号墓東辺(南半部：東から)



写真26 2号墓東辺(北半部：東から)



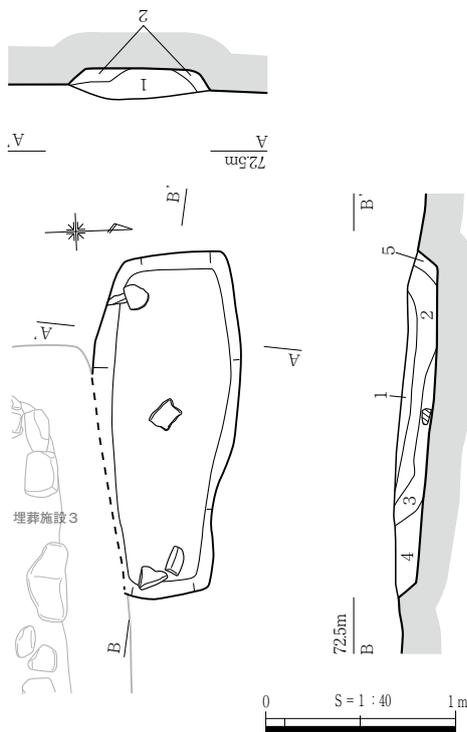
写真27 2号墓東辺(北から)

係は判断できなかった。

埋葬施設2の西側に重複して埋葬施設4が構築される。長軸1m弱の小規模な墓壙に箱式石棺を伴う。棺材は、貼石と同じ河原石を用いている。

各埋葬施設はⅣ層以下の基盤層において検出した。墳丘上は流失や土壌化が著しく、Ⅲ層(クロボク)はほとんど遺存しない。中心埋葬については、墳丘のほぼ中央に位置する埋葬施設3が該当する。墓壙規模の比較からも妥当と思われる。いずれの埋葬施設も、棺内への副葬品は皆無であった。

埋葬施設1(第26図、PL.29) 墳丘北寄りに位置する、長軸を概ね東西方向に採る墓壙である。南側に隣接する埋葬施設3墓壙とは、掘方をわずかに接する。検出面における墓壙の規模は、長軸1.84m、短軸0.78m、深さは0.18mにとどまり遺存状況は不良であるが、掘方の平面形態と他の埋葬施設との



1. 黒褐色 (10YR3/2) ϕ 1cm以下のⅤ層ブロック微混。
2. 黒褐色 (10YR3/1) ϕ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。
3. 灰黄褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。 ϕ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。
 ϕ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。
4. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。 ϕ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。
 ϕ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。
5. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。 ϕ 1cm以下のⅤ層ブロック微混。
 ϕ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。4層に色調類似。

第26図 2号墓 埋葬施設1

石を丁寧に設置しようとした意図が想定できる。

(4) 埋葬施設

概要 2号墓で検出した埋葬施設は4基で、いずれも墳丘上に営まれる。長軸を東西方向に採る墓壙が3基並列する。北側の墓壙(土壙墓か)を埋葬施設1、墳丘のほぼ中央に位置する木棺墓を埋葬施設3、南側の木棺墓を埋葬施設2と呼称する。埋葬施設1～3は互いに墓壙掘方を接しているが、検出面において重複箇所は僅かで、先後関係は

配置関係が概ね対応することから、埋葬施設と判断した。

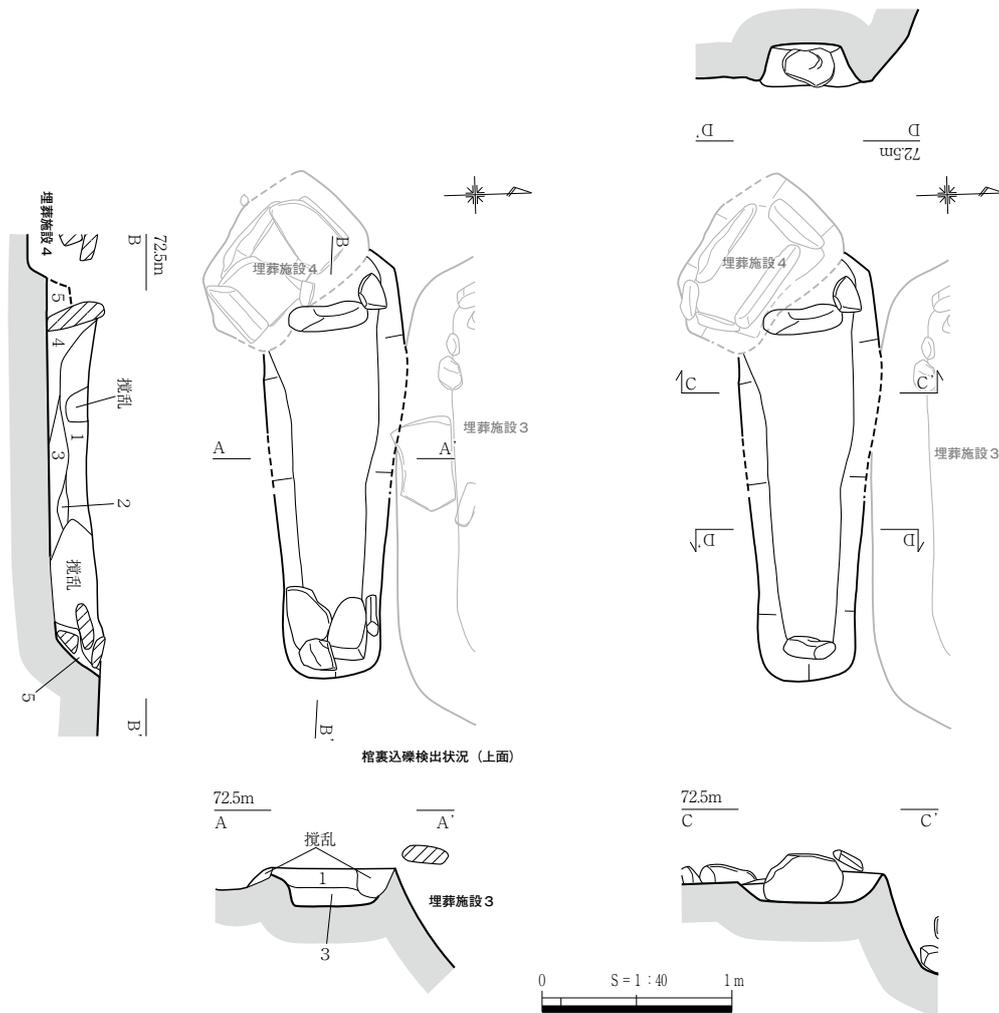
埋土の色調は黒褐色、にぶい黄褐色を主体とする。遺存する堆積からは、木棺の痕跡は認められないため、土壙墓と想定した。墓壙埋土中では、河原石を5点検出した。他の埋葬施設の様相から、木棺の裏込に供された可能性が考えられるが、樹木根の攪乱等を受け、原位置から動いている可能性が高く、墓壙外からの流入についても否定はできない。

墓壙底面の平面形でみると、西側が東側よりもやや幅広となり、西頭位の可能性を示唆する。

埋葬施設2(第27図、PL.29・30) 墳丘南寄りに位置し、北側で埋葬施設3と掘方を僅かに接する。また、墓壙西側は埋葬施設4の墓壙掘方に切られる。埋葬施設1・3と同様に墓壙長軸を東西方向に採る。

Ⅱ層下での検出段階で墓壙内の石がかなり露出しており、墓壙掘方の上半は既に消失していることが分かる。検出面における墓壙の規模は、長軸2.27m、短軸0.76m、深さは0.31mである。

遺存状況が悪いため、墓壙の土層堆積による所見で



1. 黒褐色（10YR3/2）粘性やや弱。しまりやや弱。φ1cm以下～2cmのⅦ層由来の砂粒多混、未風化の火山砂少混。φ1cm以下のⅤ層ブロック混。砂質卓越。
2. 灰黄褐色（10YR4/2）粘性やや弱。しまりやや弱。φ1cm以下～2cmのⅦ層由来の砂粒多混、未風化の火山砂少混。φ1cm以下のⅤ層ブロック少混。砂質卓越。
3. 黒褐色（10YR3/1）粘性やや弱。しまりやや弱。φ1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ1cm以下のⅤ層ブロック少混。
4. 黒褐色（10YR3/1）粘性やや弱。φ1cm以下～2cmのⅦ層由来の砂粒・未風化の火山砂少混。
5. 灰黄褐色（10YR4/2）粘性弱。しまり弱。φ1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ1cm以下のⅤ層ブロック多混。樹木根による攪乱を受ける。

第27図 2号墓 埋葬施設2

は木棺の痕跡は明瞭ではないが、墓壙長辺の両端で石を検出した。石は貼石と同じ石材で、本調査における他の木棺墓の様相と合致することから、木棺裏込に据えられた石と判断し、本埋葬施設は木棺墓と想定した。1号墓の埋葬施設2や埋葬施設4などで確認できるように、木棺の小口側を中心に石が配され、棺材を支持したと考えられる。西側の小口では、長軸0.4m、短軸0.25m程度の石が立った状態で検出された。一方、東側の小口では攪乱等により石が動いているが、複数の石を配して棺材を支えた状況が窺える。墓壙底面付近の石が原位置を概ね維持しており、これも立った状態で検出されている。両小口に施された石間の距離を木棺の長軸規模に置き換えれば、概ね1.6mになる。本墓壙底面には小口穴等の掘り込みは無く、木棺の小口幅については不明である。

墓壙埋土の色調は黒褐色を主体とする。石を含み堆積する5層は棺裏込土に該当すると考えられる。

墓壙底面の平面形をみると、墓壙西側が幅広となることから、被葬者は西頭位と推定する。

埋葬施設3（第28図、PL.31～33、写真28・29） 墳丘のほぼ中央に位置し、長軸方向を東西に採る墓壙である。埋葬施設1・2と並列し、北側で埋葬施設1と、南側で埋葬施設2と掘方をわずかに接するが、既述のとおりそれぞれの先後関係は不明である。墓壙の規模は、長軸2.62m、短軸1.30m、



写真28 埋葬施設2・3・4(北から)



写真29 埋葬施設3墓壙内で検出した礫(西から)

の並びをトレースすると概ね方形のラインが復元でき(写真29の破線部)、木棺の棺材を支持するという意図がより明瞭に窺える。墓壙の西側、木棺の小口側には長軸0.4m弱、厚さ0.1m程度を測る板状の石を小口板に沿うように立て、石の上や裏側に小振りな石を施し補強する様子が見て取れた。一方、墓壙東端の小口側に石の設置は確認していない。

墓壙底面の全体に亘り、14層が10cm程度の厚さで堆積する。色調は黄褐色を呈し、特徴から基盤層のV層に由来する可能性が高く、人為的な堆積と考える。墓壙底面付近は固結した未風化の火山砂(VII層)を掘り込む。当該層は岩盤状を呈し整然とした掘削が困難なこと、火山砂の風化の度合いが均一ではないこと等から底面に凹凸が生じやすく、棺の設置に際し墓壙底面を水平に整える必要性が生じたことが推察できる。本層上面は、裏込めに施された石群の底面レベルと概ね合致する点からも、この想定は補強される。

木棺の規模を推し量る材料は乏しいが、西側小口周辺における礫群の配置を参考にすれば短軸は約0.4m、長軸は東側小口周辺に石の設置が無いため1.6～1.7mの規模が想定できる。

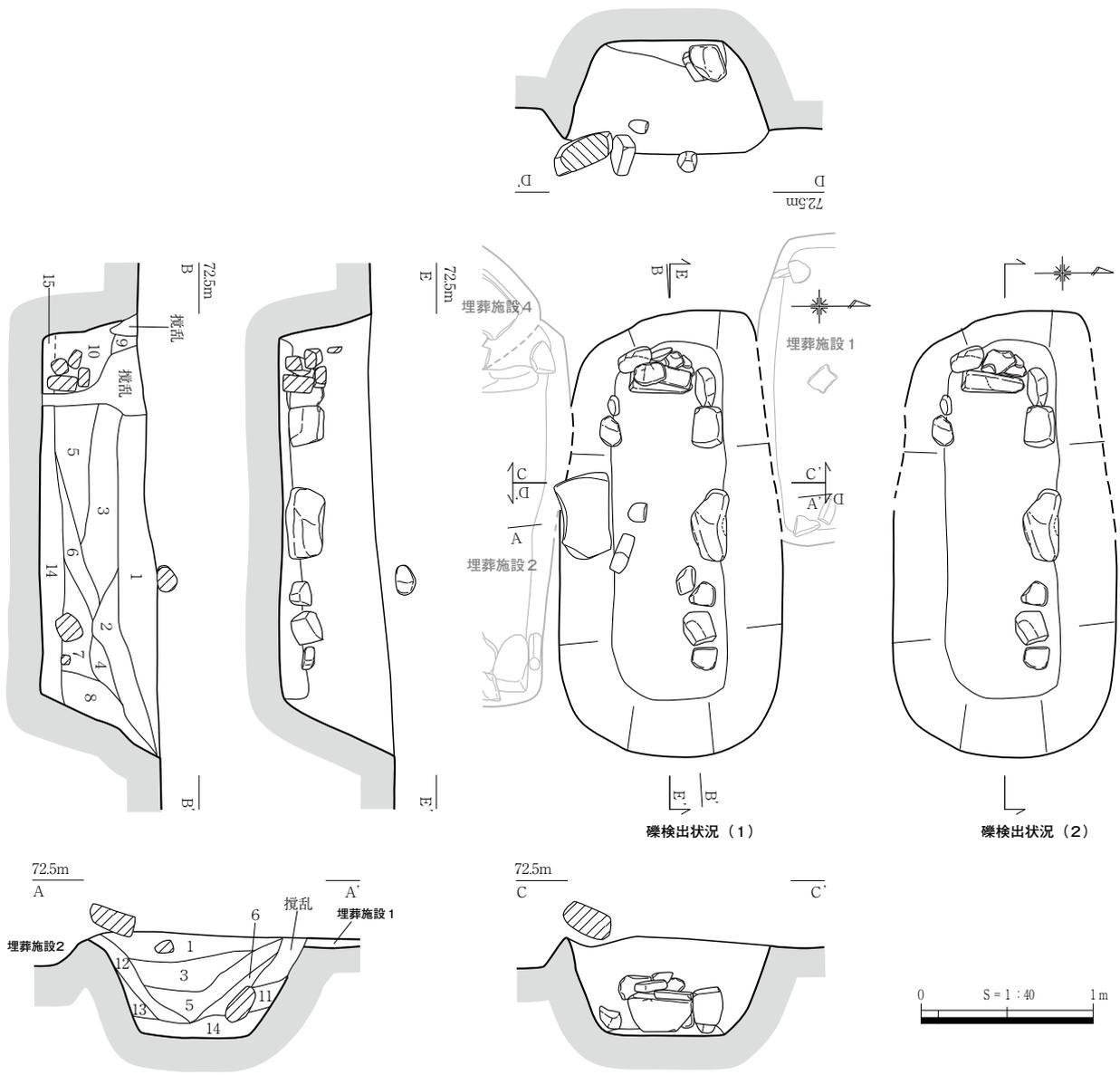
埋葬頭位についても明確な根拠は無い。ただ、上述のとおり木棺小口の裏込め石が西側のみにあることから考えれば、西頭位である蓋然性は高い。

埋葬施設4(第29・30図、PL.33・34、写真30) 墳丘の南西側に位置し、墓壙掘方は埋葬施設2の西側と重複する。重複箇所は樹木根の攪乱が著しく、土層堆積からは埋葬施設2との先後関係を把握できなかった。しかしながら、本墓壙の長軸は北西-南東方向で他の埋葬施設の主軸と明瞭に異なるとともに区画溝掘方のラインに概ね沿っており、本埋葬施設における主軸の相違は墳丘上の空地不足に起因する可能性が高い。このことから本埋葬施設は、埋葬施設2より後の構築と判断した。また同時に、空地不足でありながら、あえて埋葬施設2の頭位側に本埋葬施設を設ける意識の強さを窺

検出面からの深さは0.69mである。他の墓壙と比較して平面規模がひと回り大きく、深さも埋葬施設2に対し2倍以上で、中心埋葬と判断できる。

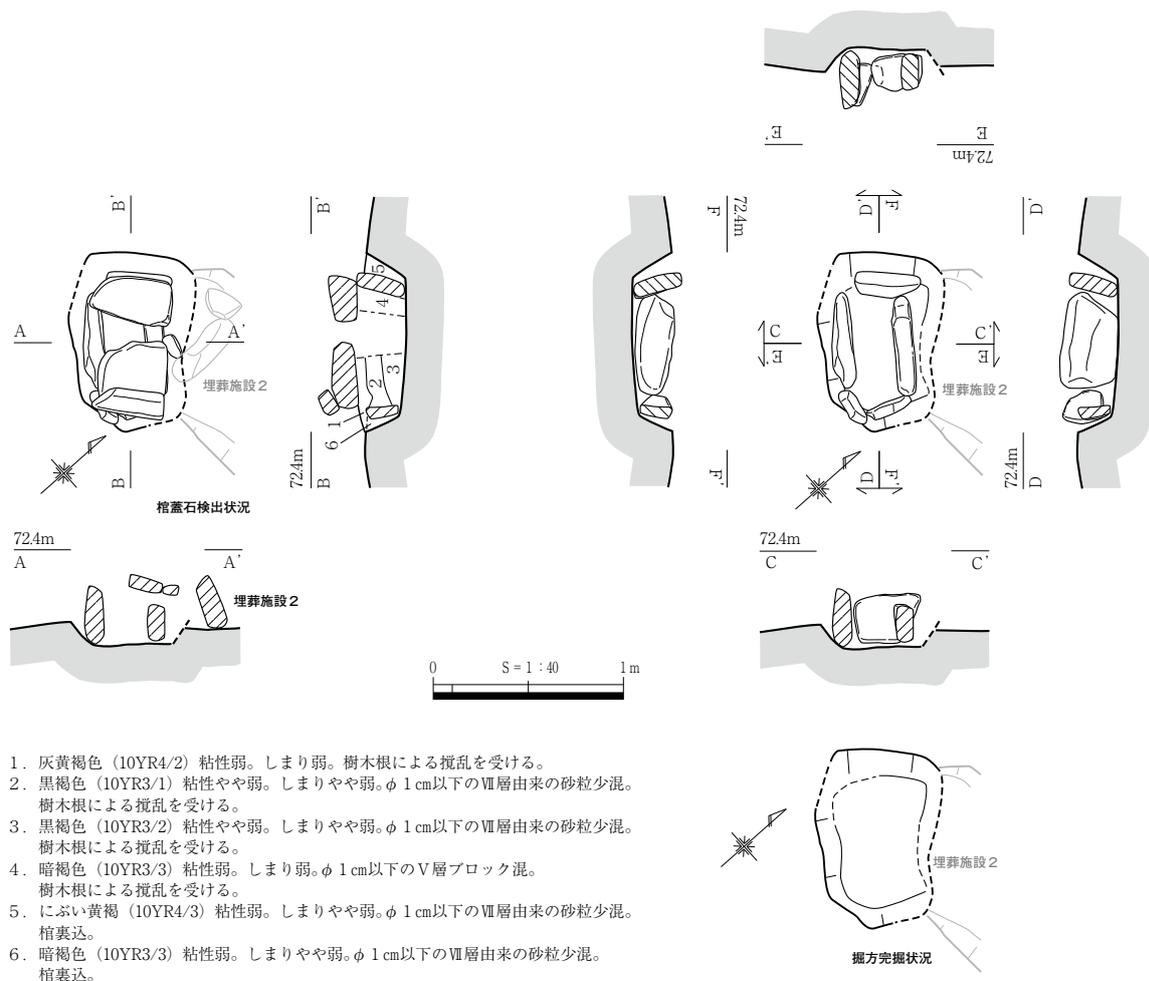
墓壙内の堆積は、暗褐色、灰黄褐色系を主体とするが、樹木根による攪乱の影響を受け、基盤層に由来する火山砂を比較的多く含むことから、全般にしまりが弱く、堆積の確認、把握に苦慮した。このように土層堆積の遺存状況が良くなく、木棺の痕跡は明瞭では無い。ただ、墓壙短軸の土層断面(A-A'セクション)における11・13層は裏込め土の可能性が考えられる。特に11層は、他の木棺墓で確認できるように、裏込めとしての使用が想定される石を含み、その蓋然性は高い。長軸土層断面(B-B'セクション)における10層も同様に位置付けられよう。

墓壙内の石は、概ねレベルを揃え墓壙底面付近で検出された。間隔はやや開くものの、墓壙壁面に沿い北辺、西辺、南辺に位置する。遺存する石



1. 暗褐色 (10YR3/3) 粘性弱。しまり弱。φ10 cm前後のⅦ層由来の未風化の火山砂混。
φ1 cm以下～3 cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂多混。φ1～3 cmのⅤ層ブロック多混。
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまり弱。φ10 cm前後のⅦ層由来の未風化の火山砂少混。
φ1 cm以下～3 cmのⅦ層由来の火山砂多混。φ1～3 cmのⅤ層ブロック非常に多混。
3. 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ10 cm前後のⅦ層由来の未風化の火山砂混。
φ1 cm以下～3 cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂多混。φ1～3 cmのⅤ層ブロック多混。
4. 暗褐色 (10YR3/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ10 cm前後のⅦ層由来の未風化の火山砂少混。
φ1 cm以下～3 cmのⅦ層由来の砂粒、火山砂多混。φ1～3 cmのⅤ層ブロック多混。
5. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ10 cm前後のⅦ層由来の未風化の火山砂少混。
φ1 cm以下～3 cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。φ1～3 cmのⅤ層ブロック非常に多混。
6. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。φ10 cm前後のⅦ層由来の未風化の火山砂混。
φ1 cm以下～3 cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。
φ1～3 cmのⅤ層ブロック少混。
7. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ10 cm前後のⅦ層由来の未風化の火山砂少混。
φ1 cm以下～3 cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂多混。φ1～3 cmのⅤ層ブロック多混。
8. 黒褐色 (10YR3/1) φ10 cm前後のⅦ層由来の未風化の火山砂微混。
φ1 cm以下～3 cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。
φ1～3 cmのⅤ層ブロック微混。棺裏込。
9. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ10 cm前後のⅦ層由来の未風化の火山砂少混。
φ1 cm以下～3 cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂多混。φ1～3 cmのⅤ層ブロック多混。棺裏込。
10. 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや弱。φ10 cm前後のⅦ層由来の未風化の火山砂少混。
φ1 cm以下～3 cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。
φ1～3 cmのⅤ層ブロック多混。棺裏込。
11. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性弱。しまり弱。φ1～3 cmのⅤ層ブロック混。棺裏込。
12. 褐灰色 (10YR4/1) 粘性弱。しまりやや弱。φ10 cm前後のⅦ層由来の未風化の火山砂微混。
φ1 cm以下～3 cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。φ1～3 cmのⅤ層ブロック微混。
13. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 粘性弱。しまりやや弱。φ10 cm前後のⅦ層由来の未風化の火山砂微混。
φ1 cm以下～3 cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。φ1～3 cmのⅤ層ブロック多混。棺裏込。
14. 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘性やや弱。しまりやや弱。Ⅴ層由来土が主体。φ10 cm前後のⅦ層由来の未風化の火山砂混。
φ1 cm以下のⅦ層由来の砂粒混。

第28図 2号墓 埋葬施設3



第29図 2号墓 埋葬施設4

わせる。墓壙の規模は長軸0.96m、短軸は攪乱で不明瞭だが概算で0.65m、検出面からの深さは0.22mである。

墓壙中には、小型の箱式石棺が納められる。石材は全て貼石と同じ河原石で構築され、蓋石を伴う。蓋石は3石を確認したが、いずれも原位置からやや動いている。また、埋葬施設3の墓壙上で検出した大振りな石が、他の蓋石と組み合わせた際に形状が一致し、本埋葬施設の蓋石と判明した(第30図、写真30)。棺は大小の5石から構成されるが、東側から樹木根の攪乱を受け、全体に西側へ若干動いた様子が確認できる。棺材の配置を推定復元したのが第30図である。棺材配置の推定復元案を採用した場合、小口側の石は北西側の方が長軸が大きく、棺規模は外法で長軸0.67m、北西小口の幅は0.42m、南東小口の幅は0.32m程度となる。棺内法は、これも第30図から復元すると北西小口で0.26m、南東小口で0.18m、長軸が0.51m程度であったと想定できる。棺規模から、未成人埋葬と考えられる。棺底には石は敷かれず、蓋石から概算すると棺の深さは0.26mに復元される。

棺内外共に埋土は全般に攪乱を受け遺存状態が悪く、堆積状況から特に所見は見出せなかった。なお、北西側の棺幅が幅広となることから、被葬者は北西頭位で埋葬されたとみられる。

(5) 出土遺物(第31・32図、PL.27・28・36)

遺物は全て土器で、Ⅰ・Ⅱ層中、区画溝埋土中から出土した。原位置を保持すると考えられるものは無い。分布をみると墳丘上で検出した資料は僅かで、墳丘の遺存状況を反映している。大半は区画溝からの出土で、転落石と共に出土しており、墳丘上から転落した可能性が高い。溝内出土の資料は、

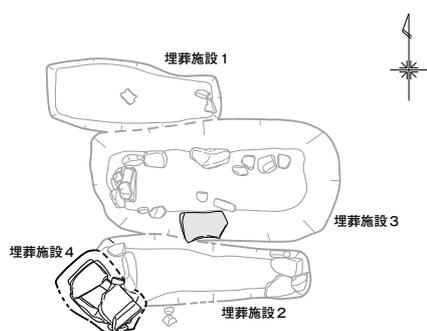
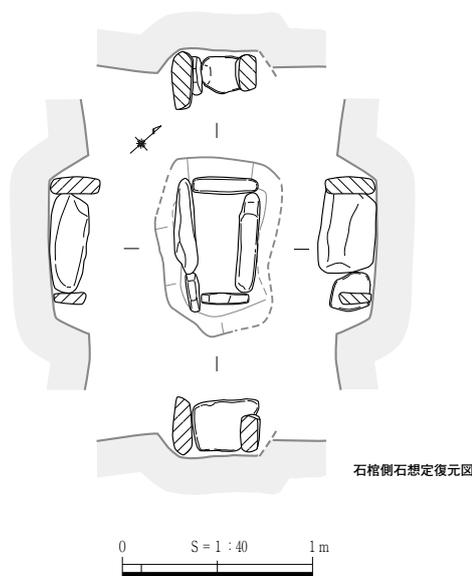
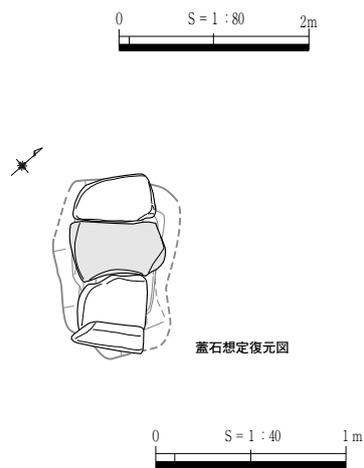


写真30 移動した蓋石(東から)



第30図 石棺想定復元図

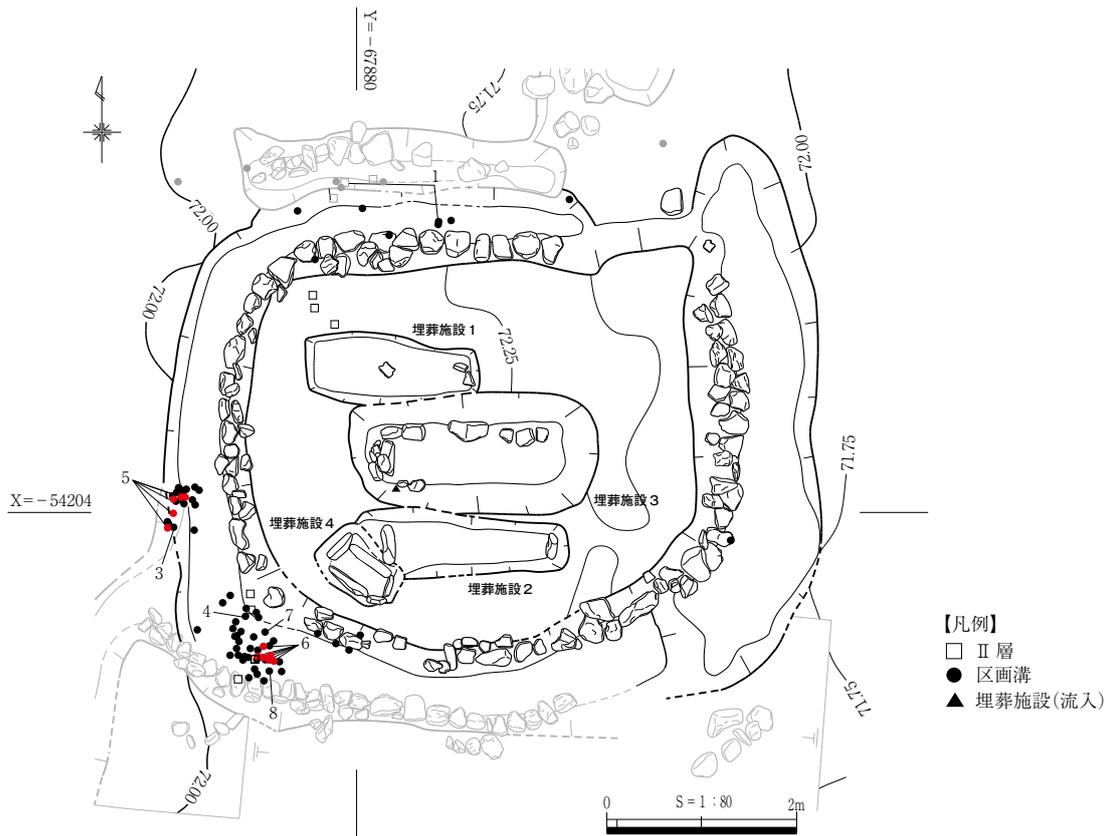
以下のように大きく三箇所でもとまりが確認できる。

- ① 区画溝北辺。1号墓区画溝の南辺と重複する範囲である。
- ② 区画溝の南西側で、これも3号墓区画溝北辺との重複箇所である。
- ③ 区画溝西辺のやや南寄りの一群。

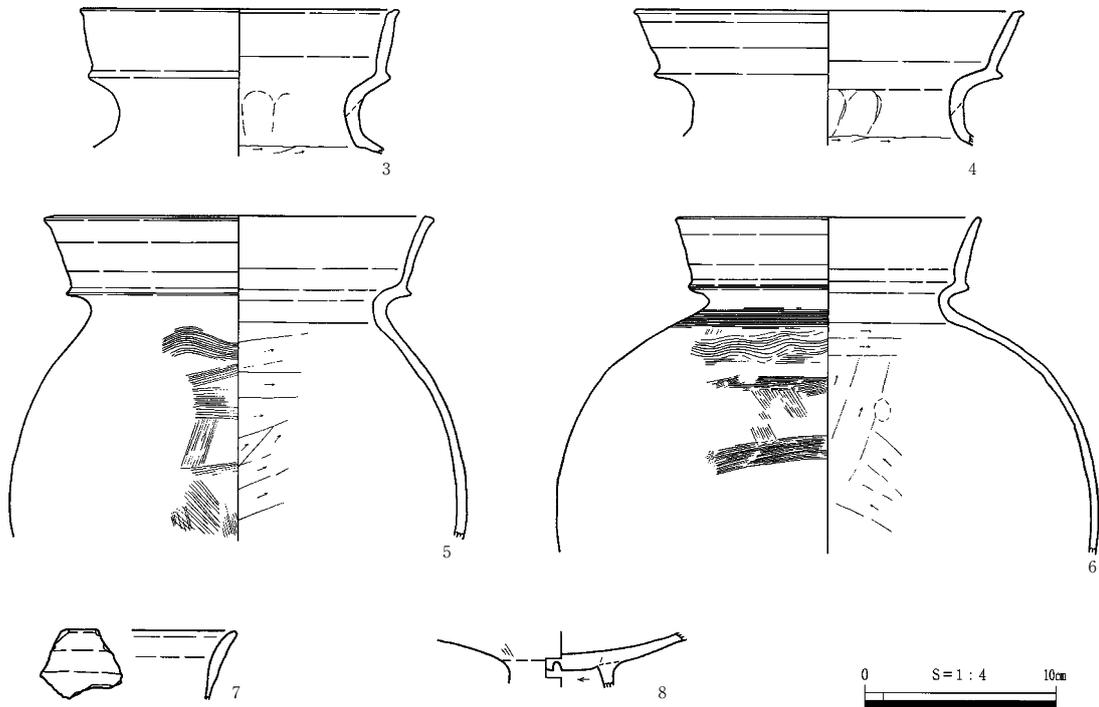
いずれも土器細片が多数を占め、個体数で見るとそれほど多くない。溝埋没後においても樹木根の攪乱等のため更なる資料の移動が想定でき、1号墓の項でも述べたが特に上記①・②は各墳墓の資料が混在しやすい状況となっており、出土状況としては良好ではない。こうした出土状況の問題点を踏まえた全体的な土器相の検討は後に行うこととし、ここでは出土位置を重視し①～③を2号墓出土土器として取り扱う。

第32図3～8は土師器である。各出土集中地点において一定数出土したが接合状況はあまり芳しくなく、完形に復元できる資料は無い。なお、7・8は平成22年度確認調査におけるTr.4で出土した土器であるが、出土位置、層位から本項にも掲載することとした(鳥取県埋蔵文化財センター 2012)。

3・4は壺である。3は複合口縁部が直立気味で、4は外傾する。共に口唇部はやや外側に折れ、平坦面を有する。口縁下端部は横方向に小さく突出する。5・6は甕である。5はやや外傾する複合口縁部を持つ。口唇部は平坦面を有し、若干肥厚気味となる。肩部にはヘラ描きの波状文を施す。6は肩部が丸みを帯びながらも若干張る。複合口縁部の立ち上がりはやや外反し、口唇部は丸く収める。



第31図 2号墓出土遺物分布図



第32図 2号墓出土遺物

肩部には平行線文、ヘラ描きの波状文が施文される。7は鼓形器台の受け部片。8は高坏の坏部と脚部の境界部分で、両者の接合には円盤充填を用い、円盤には明瞭な軸痕を有する。

以上に示した土器の特徴は、天神川編年においてはI期の範疇に含まれると考えられ、先述した資料的な課題は残すものの古墳時代前期初頭に位置付けられよう。